

アクセシブルメディアの実態調査 —国立国会図書館とサピエ図書館を対象にして—

柏木 徳子

近年、活字図書の読書に困難がある人の情報アクセスを可能にするアクセシブルなメディアへの関心が高まっている。本研究は、国立国会図書館と点字図書や録音図書等の全国最大のデータベースであるサピエ図書館に焦点を当て、アクセシブルメディアの製作や貸出制度の現状を明らかにすることが目的である。

研究方法として文献調査とウェブサイト調査、調査データ分析を用いた。国立国会図書館サーチ障害者向け資料検索を用いて点字、DAISY・テキストデータ、録音図書（CD、DVD）、録音図書（カセットテープ）、大活字資料の5つの分類に従って、アクセシブルメディアの数を調査した。調査対象は、1998年、2003年、2008年、2013年から2018年の芥川賞、直木賞、本屋大賞の受賞作品及び『出版年鑑』に掲載された年間ベストセラーとした。

調査の結果、分析対象の99%がアクセシブルメディア化されていた。資料種別内訳について、1998年では録音図書（カセットテープ）が49.2%と最も多く、DAISY・テキストデータは14.8%と少なかった。しかし、DVDやCDが普及したことにより2018年ではDAISY・テキストデータが66.4%と半数を超え、録音図書（カセットテープ）は8.8%と減少した。

アクセシブルメディアの製作状況を明らかにするため、1998年、2013年、2018年の芥川賞と直木賞の各受賞作品をアクセシブルメディア化している施設について調査し、アクセシブルメディアの製作に積極的に取り組む公共図書館を抽出した。アクセシブルメディアの製作を積極的に行っている公共図書館では、図書館の公式ホームページに障害者支援に関する情報が記載されており、資料の製作だけでなく利用方法も含めトータルにアクセシブルメディアの案内が行われていることが明らかになった。

さらにシリーズ物に関して、資料の各巻ごとのアクセシブルメディア化について調査した。上下巻の場合、出版年が同じ事が多く偏りは少なかった。出版年に差があるシリーズ物は、シリーズ内でアクセシブルメディア化の数量に偏りがある場合が多かった。

アクセシブルメディアの貸出制度に関しては、国立国会図書館では近隣の図書館を通じた利用、サピエ図書館を通じた利用、個人利用の3種類の経路があり、サピエ図書館ではサピエ加入団体を通じた利用、オンラインリクエスト、個人利用の3種類の経路があった。

本研究では、社会的認知度の高い図書を対象に調査を行った。これらの図書は99%がアクセシブルメディア化されていたことから需要に応えられていた。読書バリアフリーを実現するためには、需要が少ない図書でもアクセス可能な状態を実現することが重要である。

本研究では主として小説を分析対象として、アクセシブルメディア化の状況を調査した。今後の課題としては、エッセイや実用書など、小説以外の図書を対象にしたアクセシブルメディア化の分析が必要である。

(指導教員 吉田右子)